

遠心載荷実験室における超過勤務削減のための取り組み

2018年1月10日（水）技術室業務報告会

実験技術グループ 波岸彩子

本日の発表内容

背景

- ① なぜこのテーマを選んだか？
- ② 超勤が生じる背景

方法

誰に助言をもらい、何をしたか

結果

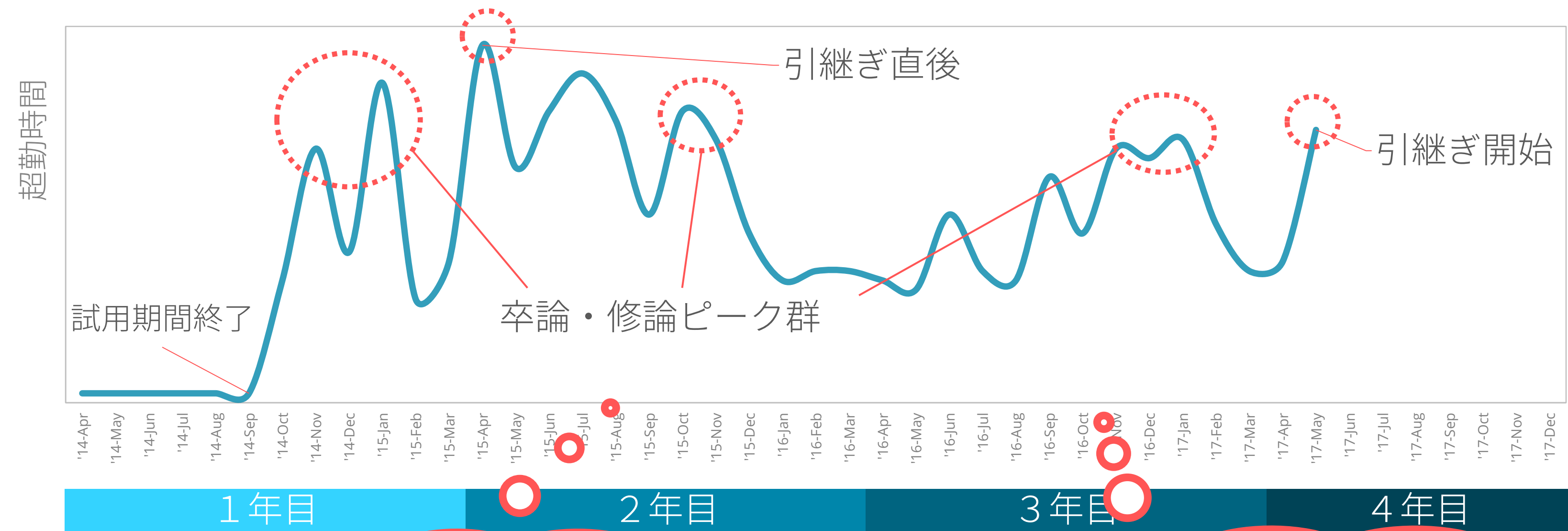
起こった変化について

背景①：なぜこのテーマを選んだか？

超勤削減の課題は誰もが抱えてること

やり方はその人の働き方や、担当している仕事による。遠心のケースを取り上げて発表することに意味はあるだろうか？

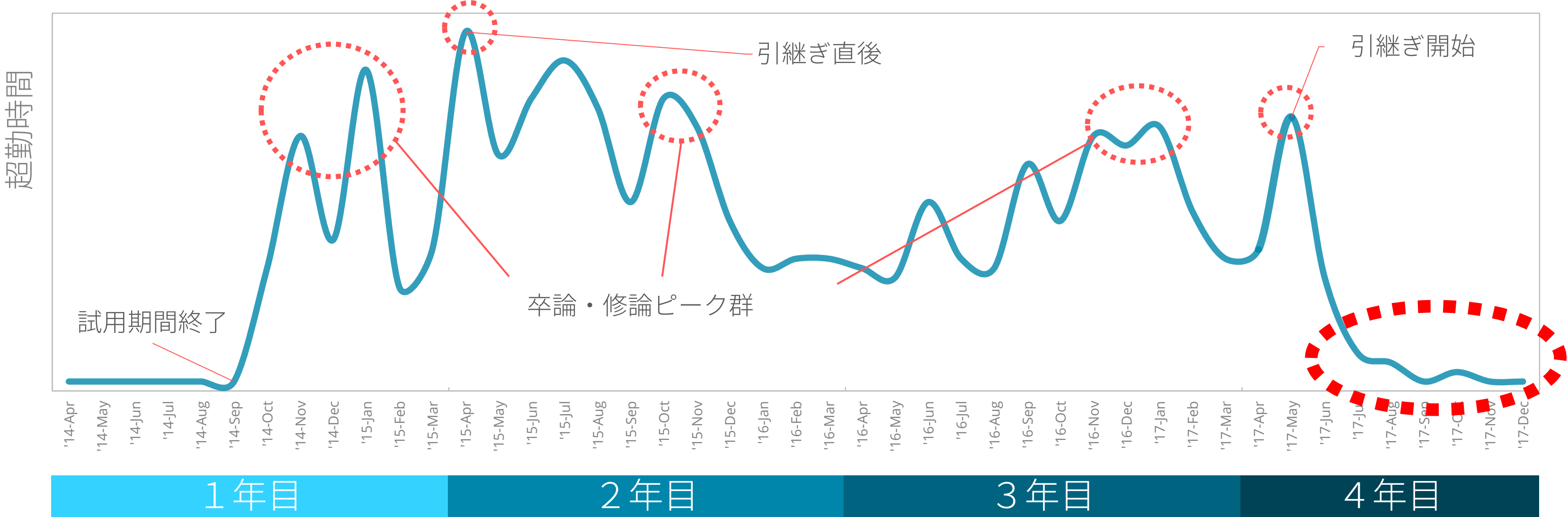
背景①：なぜこのテーマを選んだか？



このまま引き継いで
大丈夫だろうか？

遠心の支援体制が、後継職員
の求める働き方にそぐうもの
であってほしい

背景①：なぜこのテーマを選んだか？



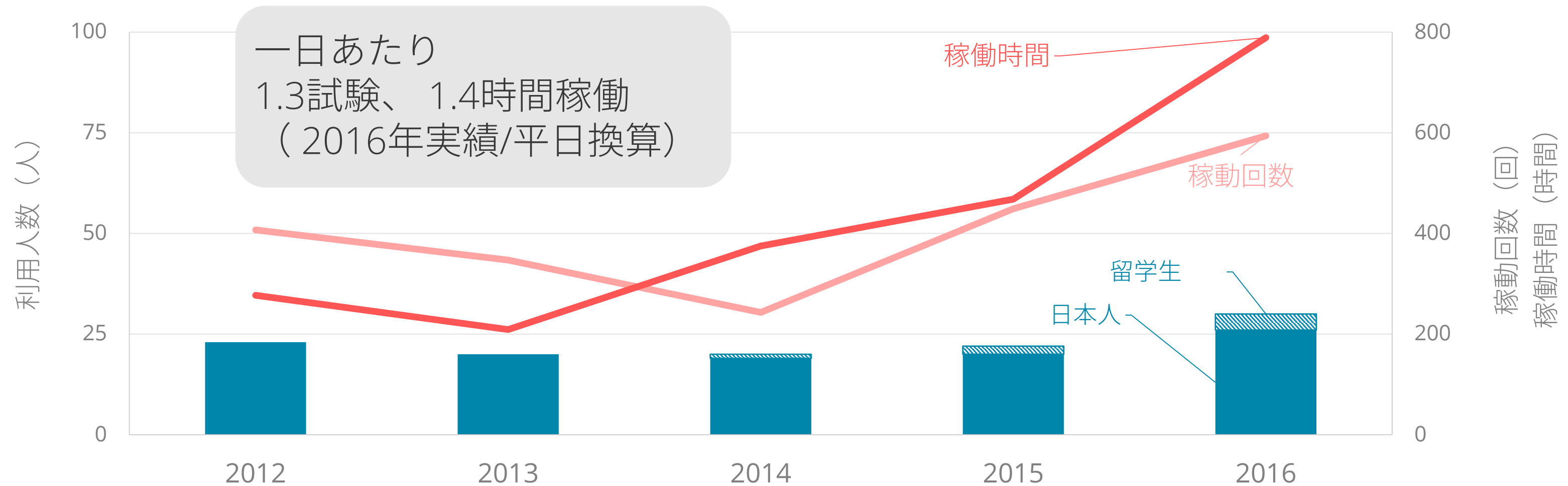
超勤のルールを取り決め、
関係者全員に周知することで改善された

背景①：なぜこのテーマを選んだか？

他の支援業務にも共通することが少なからずあるから

- 昨年度の超勤発生率 6 9 % と超勤が常態化しており、仕事のやり方をそのまま後輩へ引継ぐことに危機感を感じた
- 超勤の有無を毎日その都度判断するのではなく、ルールを取り決めて判断基準を明確にすることで、大幅な削減に繋がった

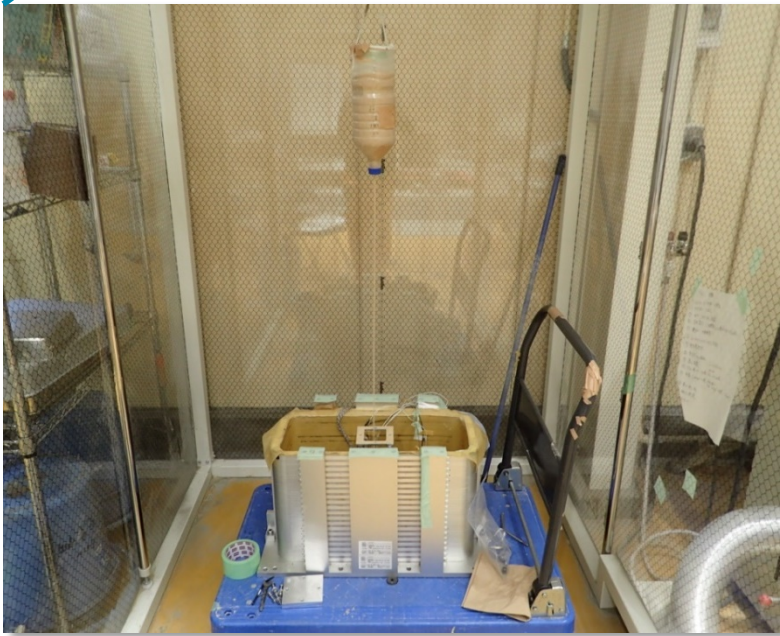
背景②：超勤が生じる背景 「近年の遠心の稼働状況」



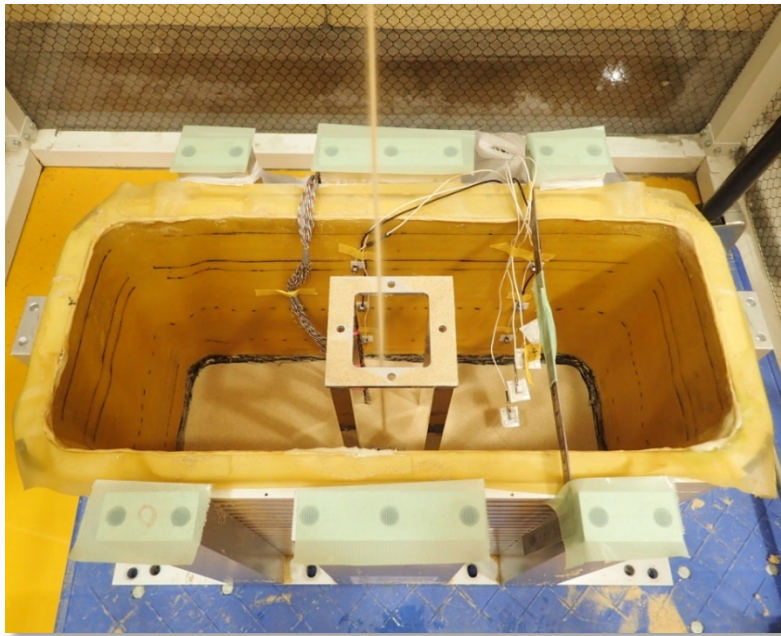
- 年平均11研究室、23名が利用（利用者＝実験責任者でカウント）
- ここ3年間で稼働時間と稼働回数は増加傾向にある

背景②：超勤が生じる背景「実験スケジュール」

	土	日	月	火	水	木	金
研究室 A		試験体作製					



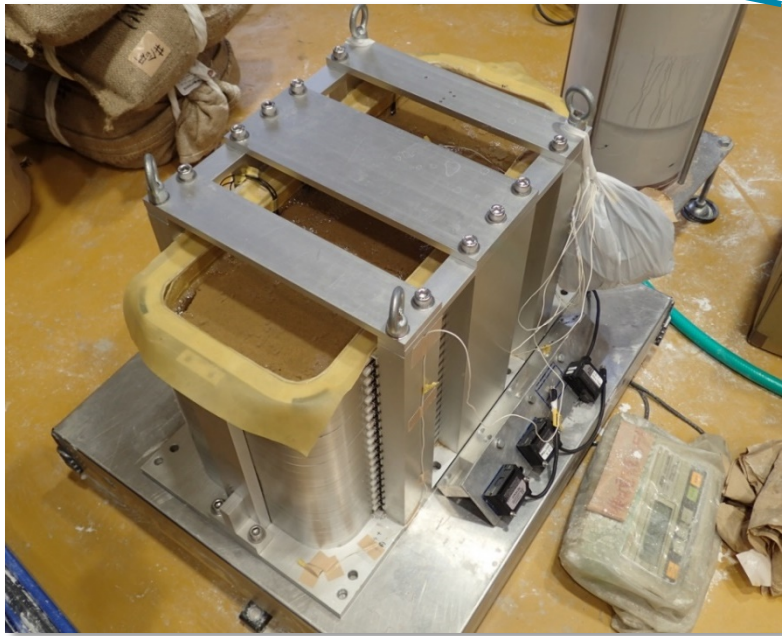
試料容器（土槽）に
試料（砂）を敷き詰めます



所定の密度になるように
慎重に降させます

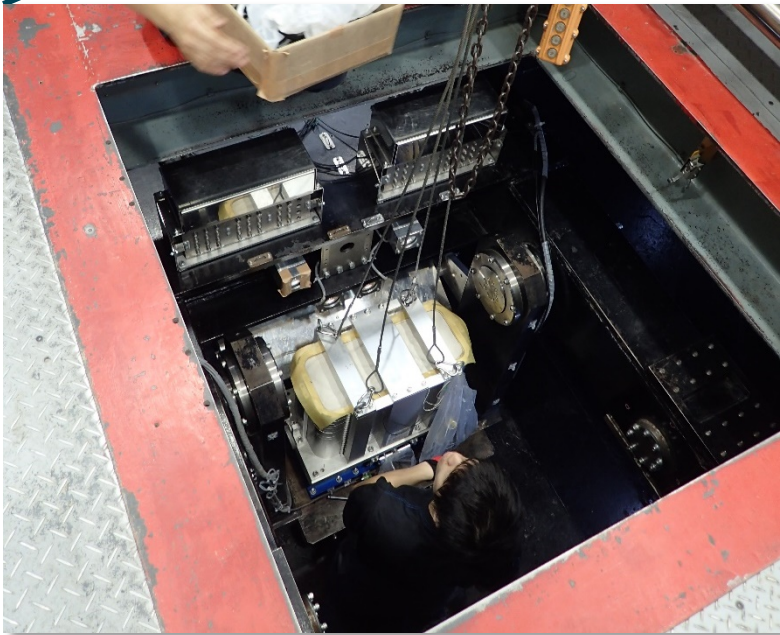
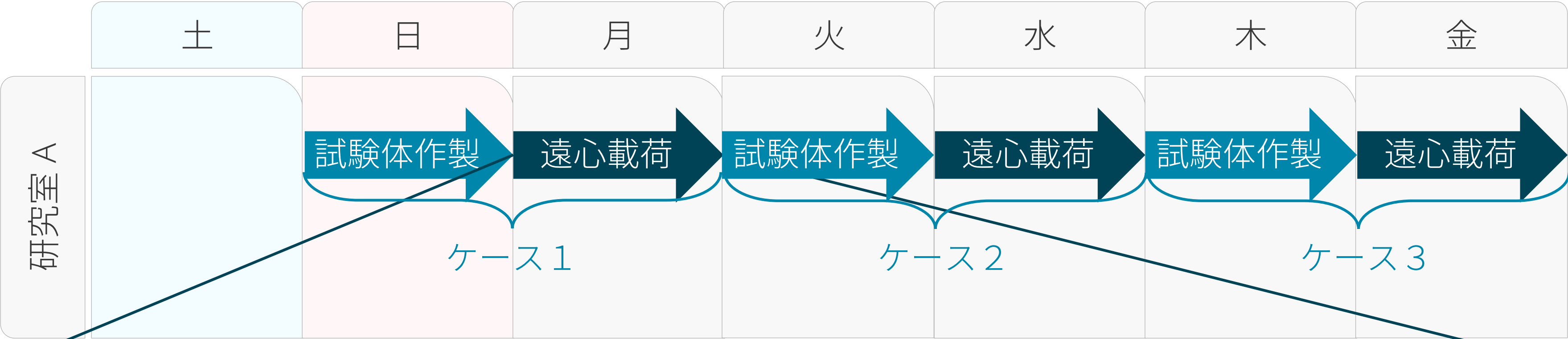


空気が入らないよう
ゆっくり溶液を染みこませます

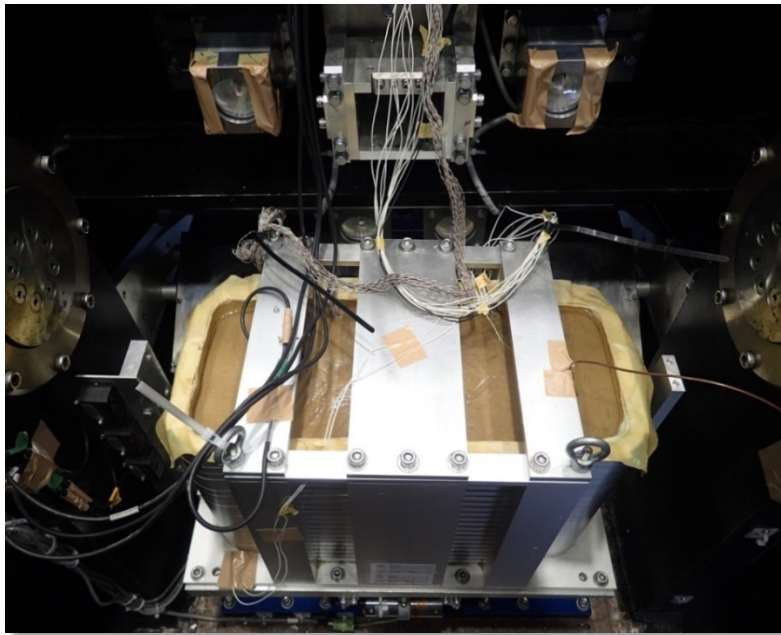


飽和地盤完成！

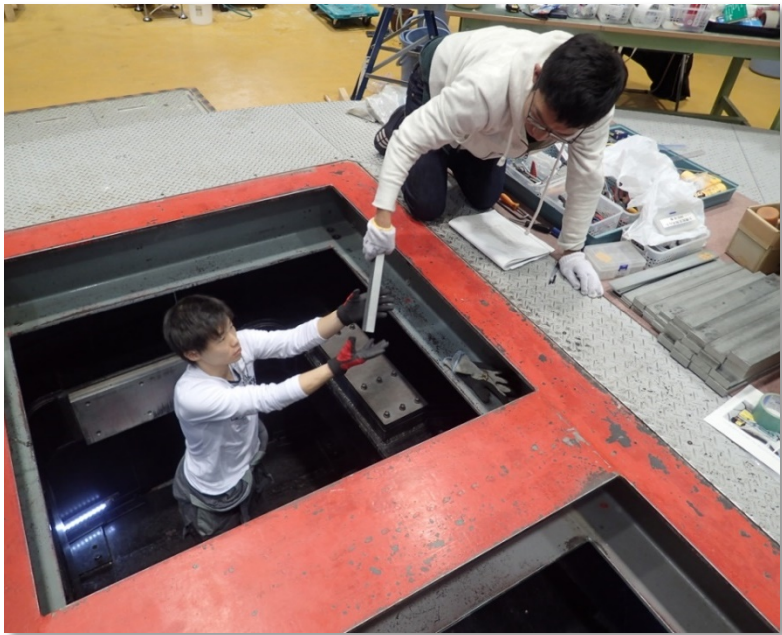
背景②：超勤が生じる背景「実験スケジュール」



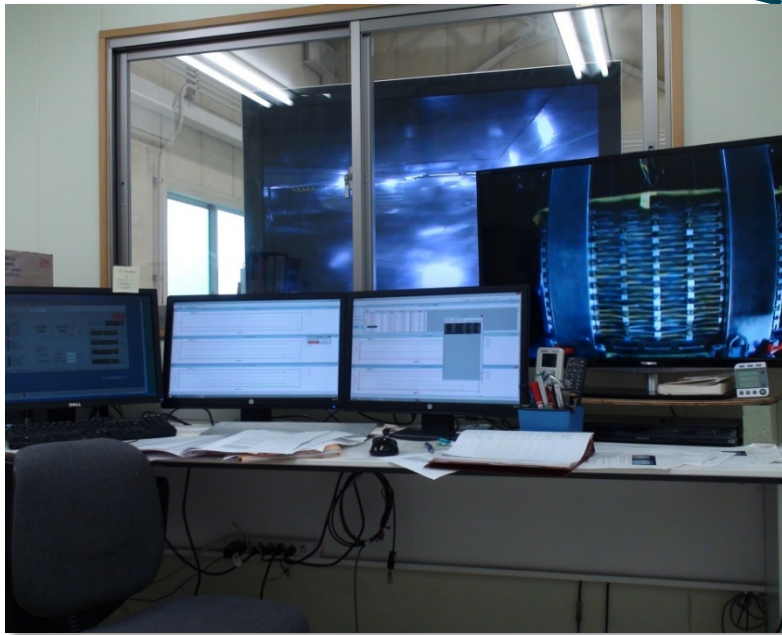
土槽をクレーンで吊込み
振動台に固定します



センサー類の結線をします

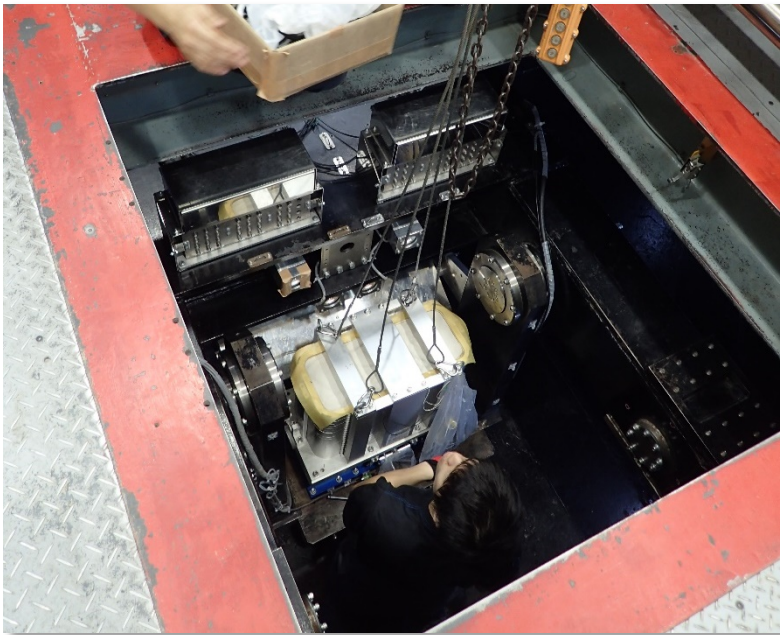
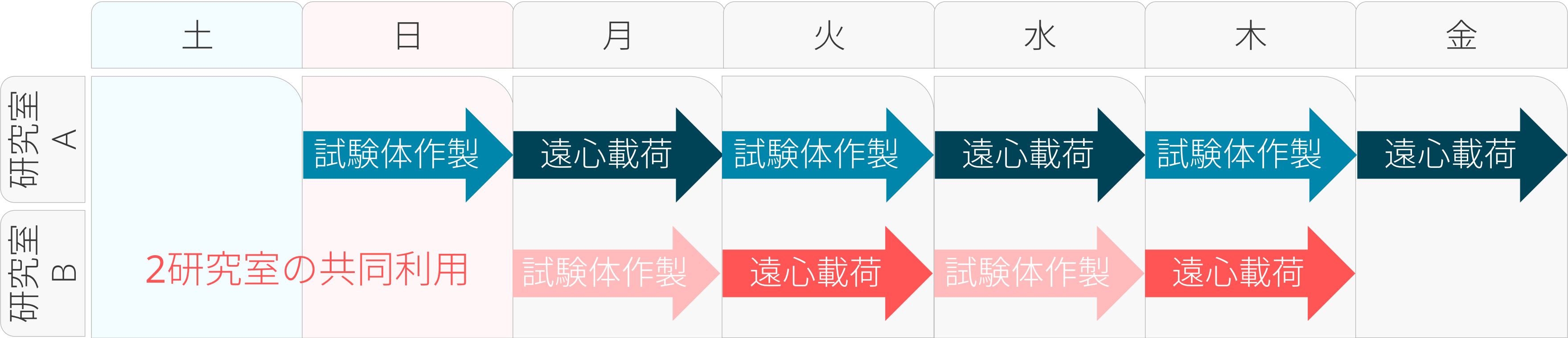


反対側に錘を載せて・・・

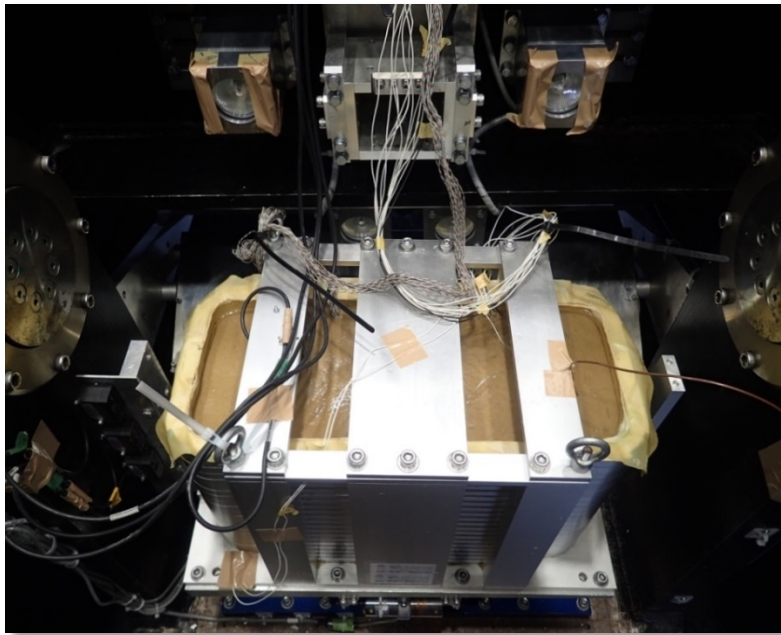


いよいよ遠心載荷！

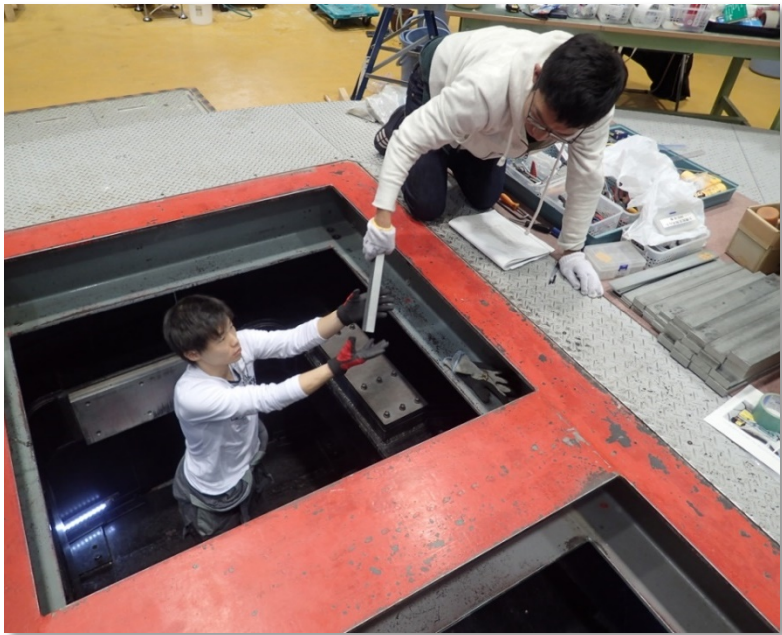
背景②：超勤が生じる背景「実験スケジュール」



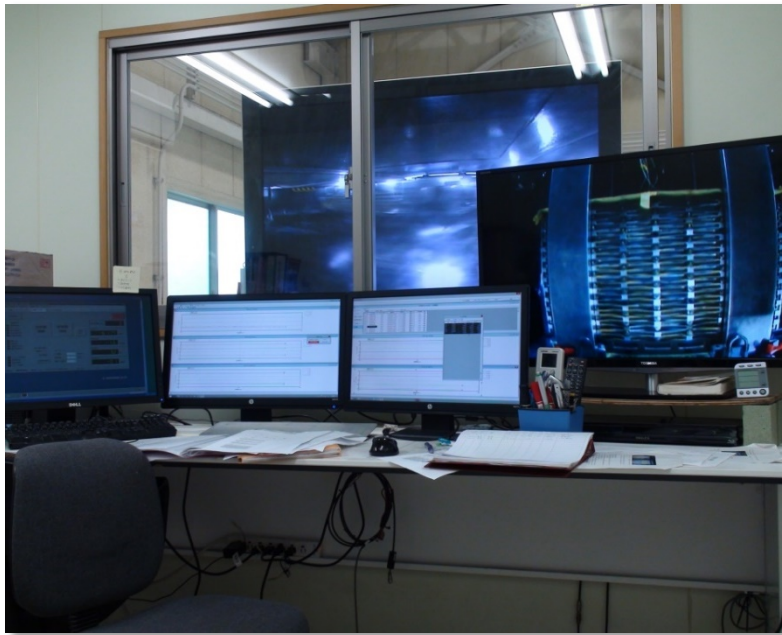
土槽をクレーンで吊込み
振動台に固定します



センサー類の結線をします



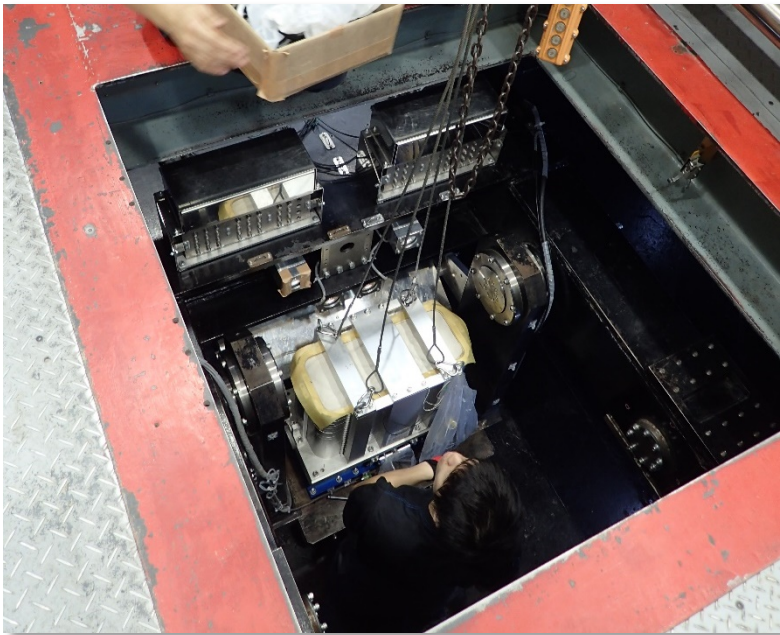
反対側に錘を載せて・・・



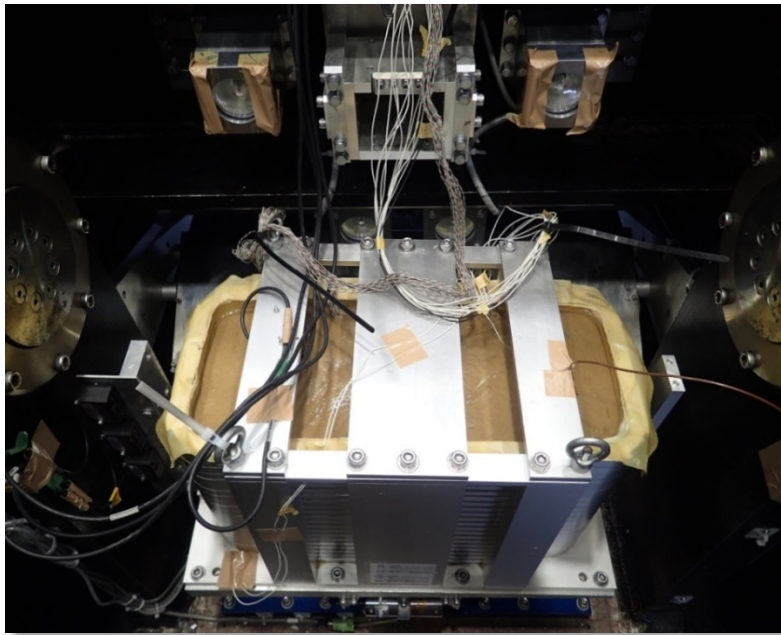
いよいよ遠心載荷！

背景②：超勤が生じる背景「実験スケジュール」

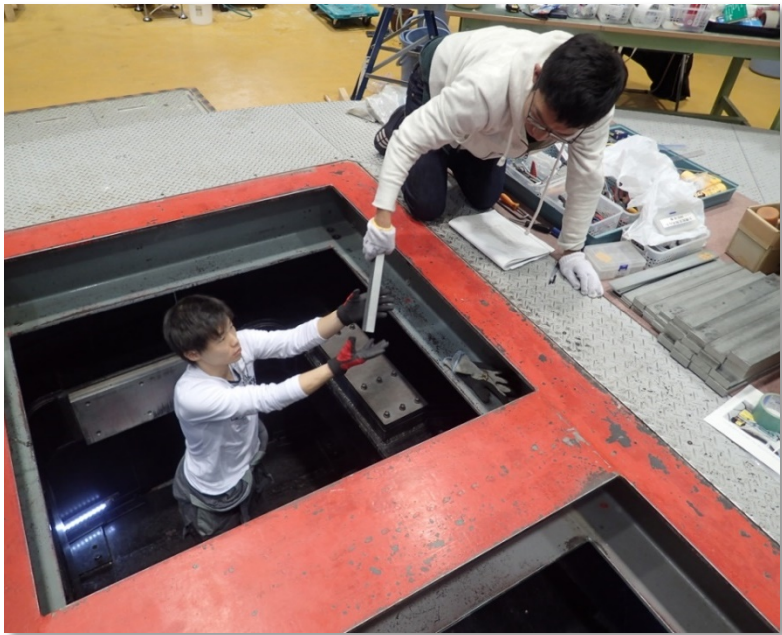
	土	日	月	火	水	木	金
研究室A		試験体作製	遠心载荷	試験体作製	遠心载荷	試験体作製	遠心载荷
研究室B	一日あたり 1.3試験、1.4時間稼働 (2016年実績/平日換算)		試験体作製	遠心载荷	遠心载荷	遠心载荷	遠心载荷



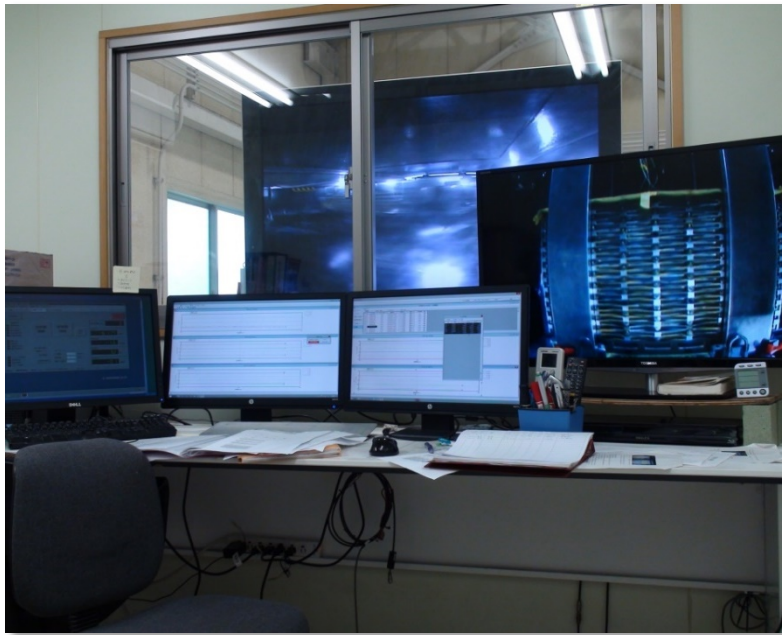
土槽をクレーンで吊込み
振動台に固定します



センサー類の結線をします

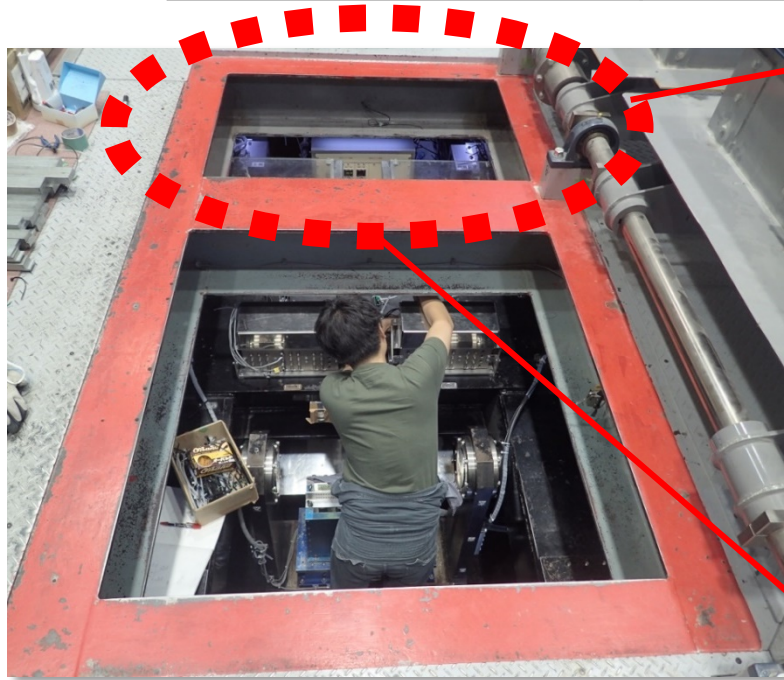
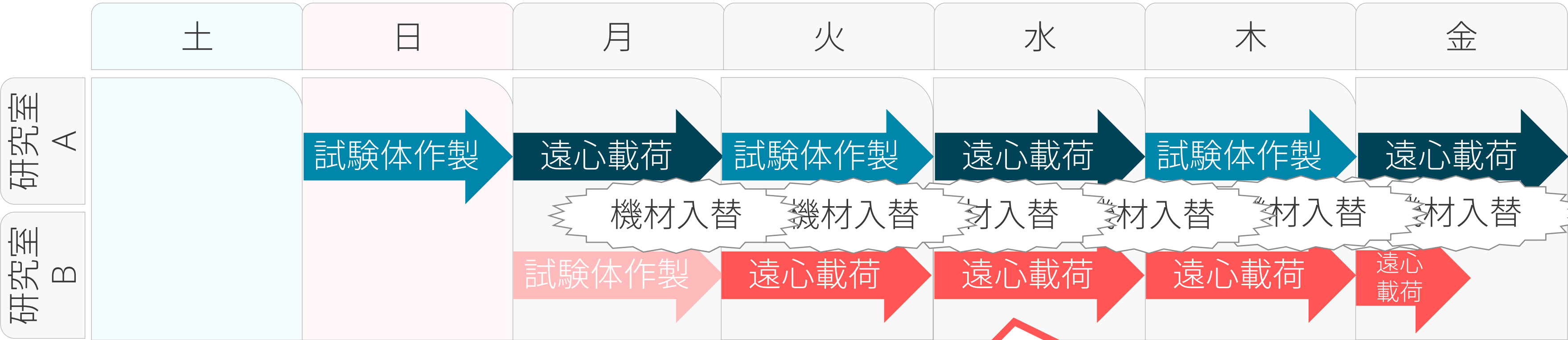


反対側に錘を載せて・・・



いよいよ遠心载荷！

背景②：超勤が生じる背景「実験スケジュール」



機材の収納場所

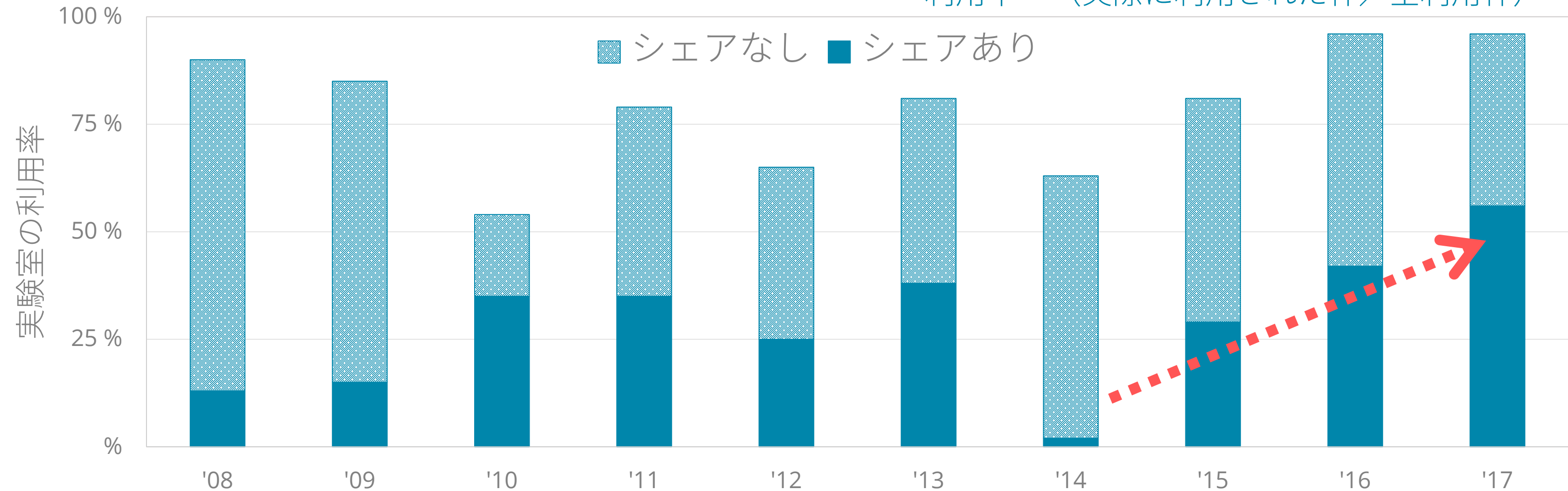


狭いため作業人数に限られる

準備不足による進捗遅れや
機器の故障が起きると
スケジュール通りには対応不可能

背景②：超勤が生じる背景「実験室の利用率」

利用率 = (実際に利用された枠 / 全利用枠) × 100 (%)



- ほぼ常時利用がある
- 2研究室以上でシェアする利用形態は以前からあったが、ここ数年で50%近くまで増加し、今後も続く見通し

方法：ルール作りにあたって

技術室長へ相談し、担当教員へ以下のことを伝えていただいた

- 技術職員の勤務形態や技術支援の仕組み
- 超勤を前提にした実験スケジュールを立てないでほしいという要望
- 実験者が責任を持つべき作業範囲を明らかにし、事前のスケジュール調整をきちんとしてほしいという要望

口頭で伝えるだけではなく、関係者全員に周知するための
ルールを作成するようアドバイスいただいた

方法：ルール作り

※強震応答実験室のルールを参考にさせていただいた

実験計画の事前提出について

一週間前までに所定の様式を提出するよう要請した。

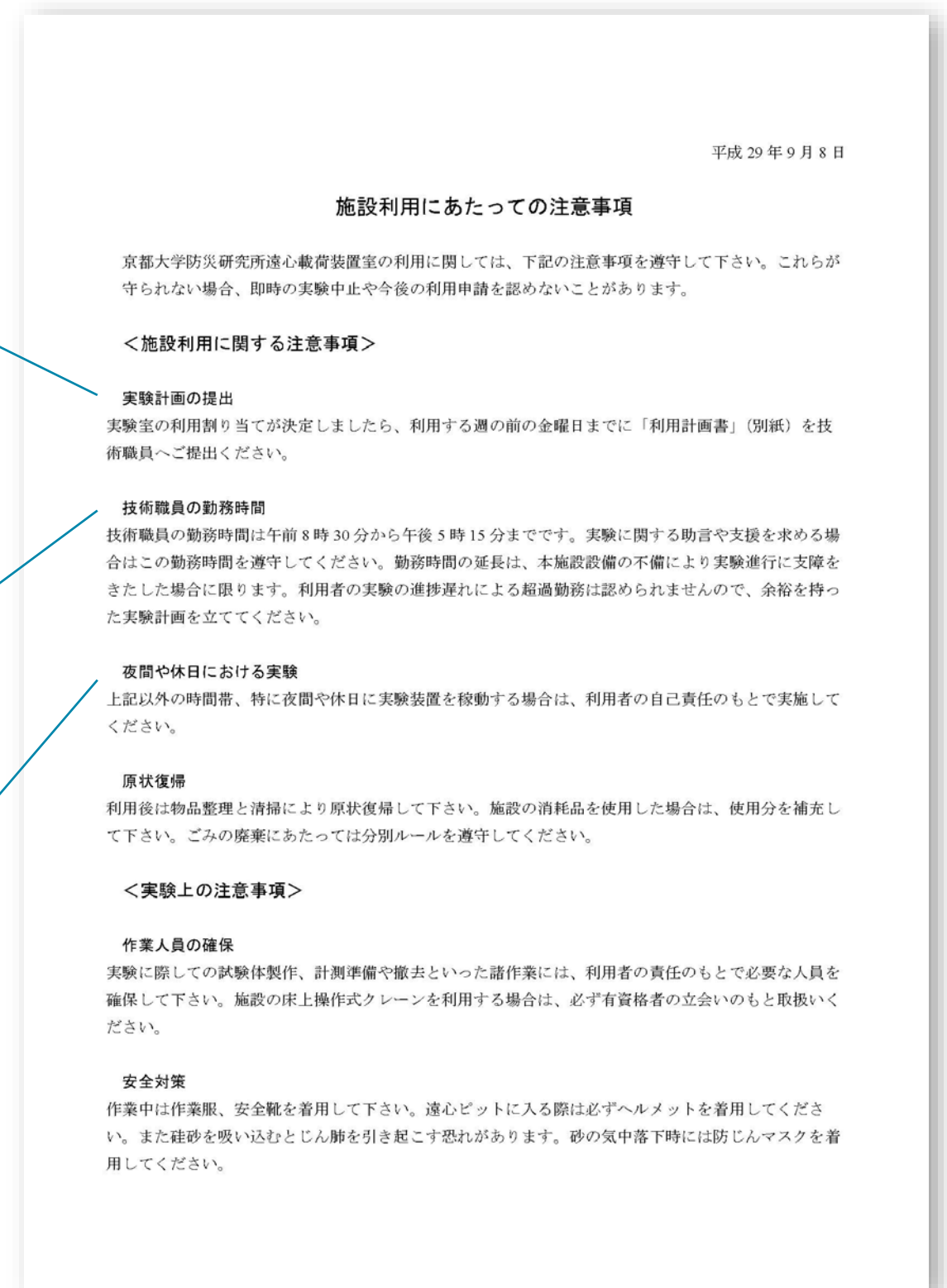
超勤の判断基準を明記

実験設備に不具合があった時のみ勤務時間を延長する。

試験体作製の進捗遅れには対応しない。

夜間や休日の利用について

原則、実験者が自己責任で実施することとした。



結果：変化の兆候

意識の変化が行動にあらわれた

- 実験者（学生さん達）の意識が変わり、技術職員の勤務時間以降に困ることがないよう、**事前に行動**してくれることが多くなった。

17:00ごろ 夜に実験をしたいのですが、〇〇はどうしたらいいのですか？

えっ、今から教えるの？

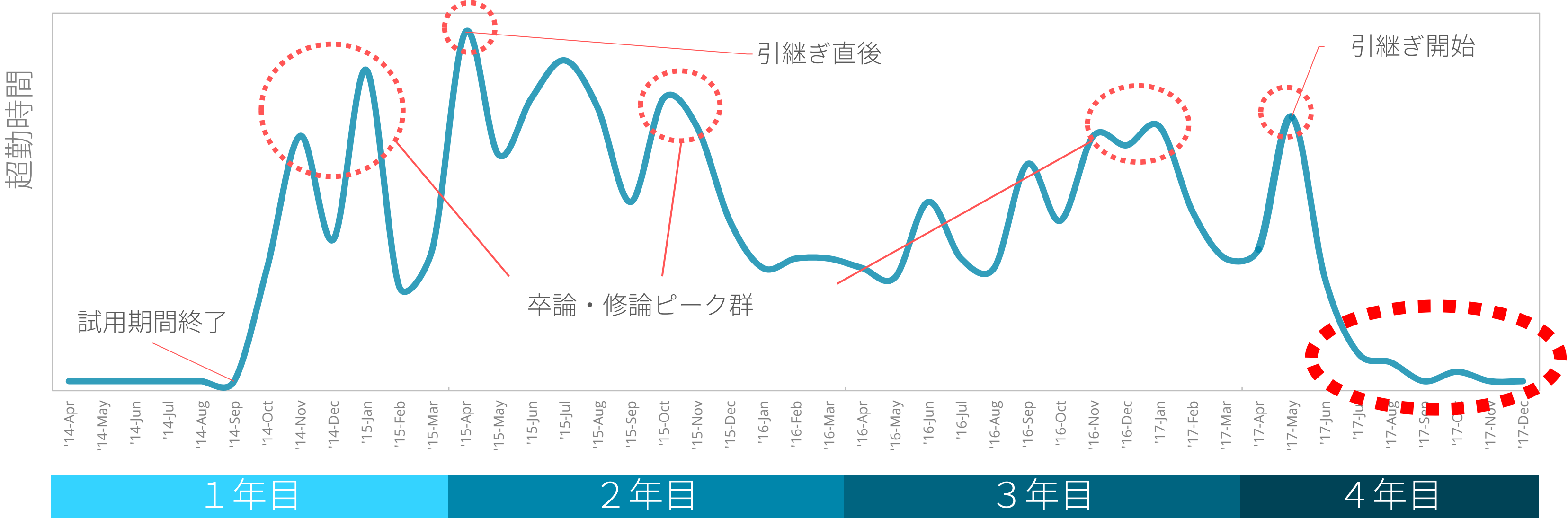
どうしたらって...どこまでわかってるのかな？

15:00ごろ 17時以降に実験をしたいので、帰るまでに〇〇の固定の仕方を教えて下さい。

了解です

- 関係者のみならず自分自身の意識も変わり、なんとなく居残るような超勤をせず、**ルールに従って行動**するようになった。

結果：変化の兆候



超勤のルールを取り決め、
関係者全員に周知することで改善しはじめた

まとめ

背景

実験スケジュールが複雑化し、超勤が常態化していた。

方法

超勤のルールを明確に取り決めた。

結果

関係者全員の意識が変わり、超勤削減に繋がった。



ご清聴ありがとうございました